

小特集：東日本大震災

まさかの被災体験

入田 和恵

いくら語っても語り尽くすことのできないその日、2011年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災は、広域にわたって被害をもたらした。のちに千年に一度の大災害と報じられるようになったが、テレビの画面で見た被災地は、言葉には表せないほどで、その記憶は薄れることがないだろう。

大田原赤十字病院の位置する二次医療圏9市町のうち8市町、栃木県全体では15市町が、被災救助法適用地域になっている。

日光・那須という観光地を抱えながら、本県の認知度は全国的に低く、位置も分からない人が多いと聞くが、地図を見れば歴然、福島県の下に位置している。最近は、お茶にはじまり野菜や肉牛が放射能汚染問題や風評被害などで、新聞に取り上げられており、県民生活に大きな影響を与えている。

地震発生時、私は図書室内にはいなかった。数人の仲間と、廊下で接客の待ち時間を過ごしている時に揺れ始めた。長く強い地震に、恐怖心さえ抱いた。揺れが納まって、1階まで下りて、業務の指示を受けた。地震直後は、

入院患者さんを正面玄関や病院裏手の駐車場へ一時的に避難させた。さらに安全が確認できた病棟・大田原市内の体育館2カ所・外泊へと振り分けた。私は、入院患者さんの移動や救急外来受付等の業務を行っていたので、図書室を見に行けたのは暗くなってからだった。

ほとんどの本が床に散り重なっている状態で、呆然と立ち尽くすしかなかった。年若い母とペットのことがとても心配だったが、連絡が取れず、携帯電話をポケットに忍ばせて、人命にかかわる仕事に戻った。家に帰ったのは午後11時を過ぎていた。妹の家に母とペットが避難していた。翌日のことから、母はそのまま預かってもらい、ペットだけ連れて帰宅した。

地震発生が金曜日、翌日の12日土曜日は病院の休診日だったが出勤。散らかってしまった病室の片付けや、閉鎖が決まった病棟に代わる病棟の開設準備をし、体育館からの患者さんを病棟へ戻す作業を行った。一晩体育館で過ごし、憔悴して戻った患者さんを見たら、涙がこぼれそうになった。

13日も出勤、何かしていたと思うが、よく思い出せない。図書室入口の片づけをしたことは手帳に書き残してあった。

NYUTA Kazue

大田原赤十字病院 図書室

k.nyuta@ohtawara-jrc.com



図1 入口近く

元来、整理整頓が苦手な私。だから、最初はどこをどうしてよいやら分からずに、茫然自失状態だった。書架の耐震補強がぜんぜん行われていないまま、前任者から引き継いで、大きな災害など有るはずがないと高を括っていたことも、今回の被災のひどさを誘発したことになるのだろう。

家ではつらかった計画停電が、病院ではありがたかった。というのは、先生方が「みんなの図書室だから」・「停電中はすることがないから」と、歪んだ書架等を廊下に手際よく運んで下さったり、足の踏み場もなく散らかっていた本の整理を手伝って下さったから。



図2 倒れた開架式書架

開架式書架5連は、すべて手放した。そのために、新着雑誌を普通の書架に背表紙が見えるように並べた。この方が見やすいとの声も出ている。



図3 現在の新着雑誌コーナー

背中合わせの書架が、2連一緒に10センチほど移動していたので、遅ればせながらだが、鉄の棒で書架の上の方を固定してもらった。11連は処分した。



図4 耐震補強

処分のために廊下に並べていた書庫や書架は、タイミングを逃し、ようやく片付けが済

んだのは、4月7日。新入職員のオリエンテーション会場近くに、被災の痕跡を残したまま新人さんの受け入れ。咎められはしなかったけれど、手伝うから早く片付けろとも言われなかった。当院は、赤十字病院の中で建物の損傷が一番ひどかったようだ。そのような状況で、人命を預からない部門からの人手の応援は頼み難かった。私は力仕事もOK、日ごろからスポーツクラブで筋トレをしているから。

さて、肝心の室内の片付けは、なかなか進まなく、この原稿を書いている今も、進行中。9月中に片づけを済ませ、別の部門に場所の一部を提供することになっている。のんびりしてもらえない。図書の仕事に専念できないことが悩みの種である。

書籍は図書申請をしてきた科毎に並べていたが、この際だからと、日本十進分類法・米国国立医学図書館分類法で整理しているラベル順に並べ変えた。これは来年の引っ越しを見据えての作業。

雑誌に関しては、“受け入れ日の属する年度の翌年度初日から起算して10年間保存する”と内規を制定しているが、置き場所があったために1995年から保存していた。書



図5 処分予定の製本雑誌

架をたくさん処分したために、現有の雑誌の保存は無理なことは分かっていた。ちょうど良い事に、平成12年すなわち2000年から保存すれば内規を守ることになる。製本雑誌の背表紙の1999年までを処分グループ、2000年以降を保存グループにひとまず分け、図書室の後ろに作業スペースを確保し、製本雑誌を重ね、並べた。この作業は、まだ計画停電中のことで、図書委員長をはじめ多くの先生方が手伝って下さった。

ところが、4月11日の震度5の余震で、きれいに重ねていた製本雑誌が崩れ、後ろのドアをふさいだ。再度通路を確保したが、7月31日の震度4の余震で、再び後ろのドア



図6 4月11日の震度5の余震後

がふさがった。奥のスペースの本は、一気に片付けたいところだが、赤十字病院での僅少雑誌分担保存に該当する雑誌が入っているはずなので、1999年以前の保存対象リストを作成し、2回目の助人要請をし、人海戦術で処分の作業をする予定だ。その後、蔵書目録を作成し、医中誌や日赤関係の蔵書目録の

更新をすることになる。

雑誌を書架に並べ始め、通路がすっきりしてきた時に、医師から「ありがとう」や「すげえ！！」と言葉をいただいた。遅々として進まない片付けに恐縮していた私には、その言葉がとても嬉しかった。



図7 雑誌を書架に並べ始めて

最後になってしまったが、被災病院ということで、赤十字をはじめJMLAの加盟館から「災害復興支援」による無償文献をたくさんいただいている。普通なら諦めてしまいそうな文献を、外国から取り寄せていただいたこともあった。

本の山積み床置き状態が長かったために、職員にたくさん不自由な思いをさせてしまった。この援助がなかったら、図書室の存在意義もなかったと思う。

感謝の思いは、筆舌では尽くせない。日本人だから、この言葉で、言霊を込めて。「ありがとうございました。」そして、もう少しの間、甘えさせてください。